AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2018.7) 平成29年度:135-136.

ICTを活用した顔の見える関係づくり ～テレビケア会議の実践から～

川端 有紀

ICT を活用した顔の見える関係づくり
～テレビケア会議の実践から～

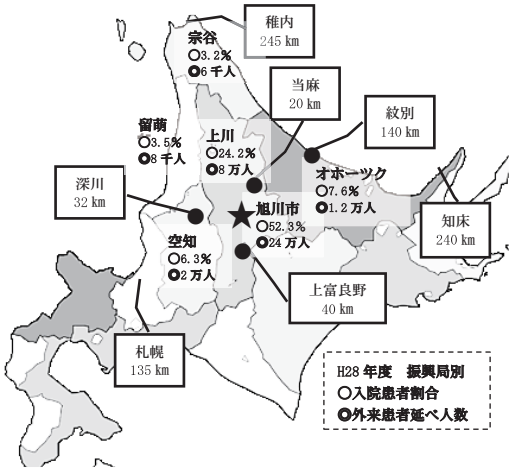
川端有紀
旭川医科大学病院　地域医療連携室　継続ケア担当

１．はじめに

旭川医科大学病院は、道北・道東地方の中核病院として広く患者を受け入れている。1日がかり、もしくは前後泊をしながら通院する患者もおり、冬期間になるとさらに気象条件や交通状況の悪い中で、長距離を移動し受診を継続する患者も少なくない。専門分化が進み、一人の患者が遠距離で複数の受診先を持つことも多く、地域連携の重要性は高い。

地域医療連携室では、地域で暮らす患者の療養生活安定のための退院支援・療養支援、院内の退院支援システムの構築やスタッフ教育、地域の医療社会福祉関係者への情報発信・人材育成を担っている。退院支援において、訪問看護師やケアマネジャーと直接カンファレンスを行ない情報共有し、患者自身とも顔合わせをしていくことは、患者・家族が生活に戻り暮らしを続けるための安心感や自信につながっている。また、認定看護師を中心とした地域支援者向けの講演会を行っており、近郊からは毎年多数の参加がある。一方で、北海道の地域的特性により、実際には関係者が集まって情報共有や検討を行うこと、研修の機会をもつことが困難な場合が多いのも現状である。離れていても効果的にケアをつないでいくため、地方であっても自己研鑽の機会を得るためには、ICTを活用した遠隔看護システムの構築が有効と考えられた。

【図１】主な振興局別の患者割合と旭川からの距離



H28 年度　旭川医科大学病院の概要
＜入院＞
病床数：602 床
1 日平均入院患者数 522 人　稼働率 86.8%
入院患者総数 13,982 人
平均在院日数 12.6 日
＜外来＞
1 日平均外来患者数 1,547 人
外来患者延べ数 375,986 人
訪問看護指示書発行 650 件
＜退院支援＞
退院支援件数 2,003 件
退院支援加算(2/3)算定件数 865 件
介護支援連携指導料算定件数 100 件
退院時共同指導料２算定件数 33 件

２．テレビケア会議の概要

北海道の地域ケアの充実、総合的な在宅ケアの支援、質の高い療養支援を実践できる病院・訪問看護師の育成を目的とし、テレビ会議システムを活用した大学病院と訪問看護ステーション等との事例検討会（以下、テレビケア会議）は、旭川医科大学医学部看護学科との共同研究としてH27年度から試行を開始している。当院からの退院患者を受け入れ、かつ日常的に行き来ができにくい場所にある当麻・深川・上富良野・紋別の訪問看護ステーション４か所（図１）にテレビ会議システムを設置し、H28年は当院の遠隔医療センターと４訪問看護ステーションをつなぎ計４回のテレビケア会議を開催した。テレビケア会議では訪問看護ステーションが抱える困難事例についての検討と、それに関わる看護分野の認定看護師によるミニレクチャーを行なった。（表１）

H28年のテレビケア会議は平日の17時半から開始し約1時間行った。事例検討を40分、ミニレクチャーを20分実施した。当院からは地域医療連携室看護師、認定看護師、病棟看護師、看護学科の教員など約10名、各訪問看護ステーションからはそれぞれ2～6名の参加があり４か所で約15名、合わせて毎回25名程度が参加した。

【表１】テレビケア会議の内容

	事例検討	レクチャーテーマ	講師
H28 年第１回	終末期のせん妄	がん患者のせん妄のケア	緩和ケア認定看護師
第２回	病識の低い患者・家族への療養指導	認知症ケア	認知症看護認定看護師
第３回	複雑な医療的ケアのある患者への支援（皮膚ケアと体調管理を中心に）	脆弱な皮膚とケアについて	皮膚排泄ケア認定看護師
第４回	糖尿病患者の合併症進行予防の支援	精神疾患を併せ持つ糖尿病患者の看護	糖尿病看護認定看護師
H29 年第１回	先天性疾患のある医療的ケア児への支援	障害受容過程の支援	新生児集中ケア認定看護師

３．H28 年度のテレビケア会議の実際と評価

事例検討では、訪問看護が生活に合わせて工夫しているケアの紹介や、アセスメントの共有、困難事例に対する個別性に応じた療養目標の検討などについて話し合われた。当院からケースに応じて PSW や管理栄養士等と連携した支援の提案や、ケア工夫のための医療材料の払い出し内容の変更の提案などを行い、訪問看護師からは解決策が広がったとの反応があった。また、最近増えている在宅患者への訪問点滴について、病院での対応や各訪問看護ステーションでの対応を確認・共有し、その後の院内の指示マニュアルの修正にもつながった。訪問看護ステーションの事例報告からは、暮らしを支える看護について病院看護師が学べる機会となり、困難事例への対応の共有は他の訪問看護ステーションの看護ケアにもつながる内容であった。また、実践している看護を他者から認められることで、困難事例にも自信をもってケアを継続していけるとの反応もあった。ミニレクチャーで認定看護師から専門的な知識を追加してもらうことで、さらに事例への理解が深まっていた。レクチャーにより、アセスメントの視点や観察ポイント、新しいケアの知識を得たり、自身の知識の再確認ができ、今後の看護に活用できるとの感想が挙げられていた。一方、電波障害により接続が一時的に中断され会議に十分に参加ができない、音声がうまく聞き取れないなどで進行が遅れ、意見交換への影響や会議時間の超過などが起こることがあった。

会議終了後の参加者への自記式アンケートとインタビュー調査の結果からは、テレビケア会議の活用により、移動時間の短縮、支援内容の充実、レクチャー受講機会の確保などの効果があり、遠隔地の訪問看護ステーションとのテレビケア会議は有用と考えられた。また、テレビケア会議でお互いの顔を見ることができ、心理的距離の短縮によって連携しやすい関係が作られていた。実際に訪問看護を調整する場合は訪問看護ステーションの所長を中心としたやりとりが多くなり、電話での１対１のやりとりが主となるが、テレビケア会議では複数のスタッフとも顔を合わせてディスカッションすることができ、検討の幅の広がりや参加者との関係が深まったことを実感している。認定看護師のミニレクチャーは好評であり、その場で質問でき助言をもらえる機会を持つことは、地域の人材育成に有効と考えられた。課題としては、電波障害や時間のずれなどのシステム運用上の問題や、事例提供準備の負担軽減、時間短縮などが挙がった。

４．今後の課題

H28 年度の評価から、今年度は事例検討とミニレクチャーを別の日にし、事例検討をより活発に行えるように変更し実践している。ミニレクチャーは事例検討の内容をふまえた上での資料を作成してもらい、事例検討の１～２週間後の開催とした。時間は希望により昼休みを活用した開催もできるよう調整し、レクチャーの内容は録画しメディカルミュージアムに保存することで、当日参加できなかった看護師も聴講できるようになっている。試行を始めたばかりであり、回数を重ねて今後も効果的で効率的な会議となるよう評価を継続していくことが必要である。現在の Wi-Fi 通信では安定した電波が確保できないこともあり、有線での接続、運用コストも課題である。また、退院支援において、高齢化が全国よりもすすんでいる北海道では、訪問看護のみならず、生活全般をマネジメントして支援してくれるケアマネジャーとの連携が重要である。介護支援連携や退院前カンファレンスでもテレビ会議システムが活用されることで、遠方の患者の支援者との密な連携、顔の見える関係づくり、支援の質の向上につながると考える。通信環境やコストの問題もあるが、入退院連携の手段として活用の幅を広げ、気軽でタイムリーな連携・調整を行なえる遠隔看護・ケアシステムの構築へとつなげていくことが今後の課題である。